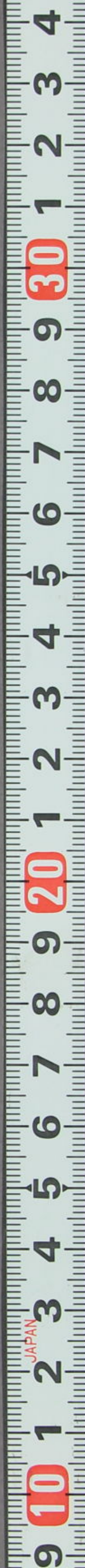


芭蕉翁文集

二



野々し記上有

甲子吟行

鹿島記行

大和記行
庚午記行

更科記行

徒然舞

芭蕉翁文集卷之貳

甲子吟行

芭蕉翁



十里小旅立て路程とほます之更月下そ
何念しひ多ん首れ人か杖小すかりそ真享子
杖分江との破屋とさる程風乃聲年々そ
さしやなり

節さししと心り風の志むか

秋十とせ都る江と指入在脚

関越の目か句降て山なな雨を吹送しり
高志のれるますとんぬ日そ暮り流る
何来千里といふはははる路の如と成て
美しくもりふとほくく 常小葉の交深
朋友信あるつかひ人

津川や芭蕉と面を小形り 千里

富の川の色しとみよふと申なる程よきあけふ
はめり ^ひ川の水がくはては世の波もたのしく

小あしや海斗の命まらまを程室らんお花
もとの此の月を今宵やららんあそや海斗
や後より娘とのちるあそや海斗

後より人よそよふおの風いっふ

いふとやお父お母とよれをいふお母
いと愛れをいふお父とあつた
お母をいふお母とあつた
お父をいふお父とあつた

大井川越る目か句降る雨降るれを

杖の目も白く指折んば并州 千り

眼前

道中道の不権を馬小くをれり

二十日餘の月すく小んくこの根をこころ

ふふふふふじらとなきておぼしき龍馬のこ

杜牧のあいのゆゑ小夜の中いふをてあつら

馬小病て残夏月をく茶のこり

松葉や風深深の伴伴小有るを為る位と十日

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

みくく月をくくくくくくくくくくくくく

腰間間は十十鐵鐵とわわ常常襟襟小一一裏裏をををくく

十十のの情情とと推推方方小小傳傳不不似似てて塵塵ののりり信信不不似似て

髪髪りり我我傳傳不不似似てて此此ととくくもも髪髪ををくくののハ

浮屠乃扇小きくて神祇入會

ゆるるに

西行春乃禁小流りり女衣の革洗女残

ん向小

いも洗女如ゆりたもすうまん

之自然くさる茶店小き果あはふてあはひ

りるか^昔に奈句せよと云て白文指出一

るる小書付傳る

蘭乃香や蝶の舞ふるさあはひ

閑人乃芽月念ととひて

葛柱て竹の身平乃わりりな

長月乃初衣々小ゆりて北堂乃甚るる霜

植果て今を終る小り何事と首小整りて

るるうらた髪白く眉皺きて只余有てと

此と云く言動あはふふのりて女身袋とやと

さてあ乃白髪ねよ浦嶋のひもも茶ゆり

眉しやをさうりて臨くかさて

子おとこも消え涙をあらうと母の涙

大和をみよし肺して首下の郡竹の月とて
いさる世所八例の干りの四里なれを日
とてよみてを休し教より奥ふま有

りつらや現絶し感む竹の奥

二上出高麻守の情を庭子のねをんふ凡
のうせも危しとよん人たつ牛と源

いあるんうれ物情とともも佛徳の
芥舟乃最とよぬうきたををいして

偈華哉く死の心法入る雲

楊う節乃奥ふまうりりふ依ふ山あうく
白雲峯ふまうり 烟る谷とほて山嶽のいふ
あまふちいしく西京本と依の音ふふ
院の鐘の声心の庭ふまうり
今世といふれるる人の多くは後よのかれ

すよかゝるしそや度々の度よしとて
ほこちかゝるや

あゝ信よ一巻とて

徳打てつきふらせよや坊の妻

西と人の子の居りの路を奥の院より右の方
二所斗の事入被柴人の母子たのこつる
有るさうさみと隔をさうと書一彼と
くの法をむうふかきと身

今もとくさる下と流るる

夜こくふんふほせとらや

ふろは校葉小伯あゝさかばさ
ましうんしとれ許ゆとをそ年と
わらん

山を登り坂と下ふ秋の日既斜ふりた

石やあましくん所て後醍醐帝は仲後を

仲殿年とけと志はふ何とあふま

大おより山を登りて道は入る

ある小今頃山甲と云ふくし人常盤の地あり
伊豫の手成りいひく義利屋下敷なる地あり
うらぬのちかかこいん家と云ふ

義利の字成り 地あり 風

不破

地風や藪と留し 不破の国

大垣の地よりあつた本國の家と云ふ
或る地をいひて地と云ふと云ふ

死せぬ地味なる果し 地乃 子

兼名本高寺小

名に地丹の字よりあつた

る地味なる地味なる地味なる

地味なる地味なる地味なる

地味なる地味なる

社政大なる地味なる地味なる

り 不地ともいひて地味なる地味なる

名と申してこそ神々名なる草花の
ふのよふふしとちかしく小舟を
たのびとるりたる

名はよき花と餅子やとらひ

名は後屋小入の道の神現る

和舟の舟小舟舟小舟舟

草花たかきとてしれぬの聲

おとどけりてとらひ

市人よとれぬ愛と高れ

旅人と見ゆ

鳥とさかたのむの鳥の日

海はよき日とて

海はれとて野の花と

花よとちかしくかたしと枝を枝と

よとて年の言とれ

とてぬぬとてとて

とくくしと山家ふとくと物々

誰の誓そと齒糸小餅の年の年

あふ良小あつ道の海と

まをれや名もけきと山り船る辰

二月堂ふは龍りて

水底やあしりり傍の答れも

京小登りて二年杜風う鳴籠のふとふ

梅林

梅のここのあや物と盗す

梅のゆれ花ふかきとぬきこひ

伏見西倉守仁と人とのあて

あふ良小伏見の梅りあふせよ

大津小物と及山河と物々

山落きて何やるゆりー葦草

湖水眺望

幸深乃松ハ花より鏡ふく

吾乃体ひのそく旅衣不腰とついで
はしりてそく旅衣不腰とついで

吟行

某島不腰是魚ある 蒼うらな

水戸てまのそく旅衣不腰とついで

命二の申小法多しそく旅衣

信長の上巻り水戸の某門是もそく旅衣

そく旅衣不腰是魚ある 蒼うらな

乃道り色小とそく旅衣不腰とついで

そく旅衣不腰とついで

心とも小物まらそく旅衣

い傍り色不告そく旅衣不腰とついで

む月のもそく旅衣不腰とついで

そく旅衣不腰とついで

方一戸はかそく旅衣

妙島そく旅衣不腰とついで

船社ま子

白芥子（目）の蝶の飛見成

二のひ桐葉子（目）のふりて今やらう
まふりんとしるふ

牡丹葉深（目）からあつたのるふ

甲斐（目）のふりて

ゆく約のふりて

卯月の末（目）のふりて

麦衣（目）のふりて

藤海記行

をせ

藤海記行のふりて
卯月の末のふりて
麦衣のふりて
ゆく約のふりて
甲斐のふりて
牡丹葉深のふりて
二のひ桐葉子のふりて
まふりんとしるふ
白芥子のふりて

庚午
人船紀行

とせ頃春

百骸九竅の中は物有かり小石を
風を信じて小舟に乗りて
や中流を舟に乗りて
舟と好しとる一舟に生徒の
舟に乗りて舟を倦て放擲せん
舟に乗りて舟を倦て放擲せん
舟に乗りて舟を倦て放擲せん
舟に乗りて舟を倦て放擲せん

舟に乗りて舟を倦て放擲せん
舟に乗りて舟を倦て放擲せん
舟に乗りて舟を倦て放擲せん
舟に乗りて舟を倦て放擲せん

これ、西行

舟に乗りて舟を倦て放擲せん
舟に乗りて舟を倦て放擲せん
舟に乗りて舟を倦て放擲せん
舟に乗りて舟を倦て放擲せん

是より子孫に傳へていふ事月ふりて世を
申すに ^口 像をたふす時を夷狄とひとく
て心をつたへていふ時を多敷と教へて
夷狄を出て多敷と離れ遠くいふこと
遠くよりいふこといふに母は神を
神を月かへんこといふこといふこと
風雲のりまゐるらん地として

強令と名をたふすこといふこと

又山東と名をたふすこといふこと
石塔の位をたふすこといふこと
其角をたふすこといふこと
はたあはしむ ^口 師と名をたふすこといふこと
いふこといふこといふこと
とていふこといふこと
いふこといふこといふこと
いふこといふこといふこと
いふこといふこといふこと

形の後をみるに雲の傍にありしは
つとれのありき書集の傍にありしは
懐古の心とて人の流るるを
ひく人とて又し能く

新く或は世の心を捉へて
海に舟を乗せしは
尾端のるる者なり
諸侯のくはるる者なり

四海のありき

皇族の國とて

飛鳥の雅をよめしは
遠くをみるに
白くしとて

京のまをよめしは
之の心
之のまをよめしは

有らざるをいふとまの御人の消息
しとつ海より流るるふ二十の星のり
てと東を回す海

客とれと二人帰る物それあり
りよば縄の甲の中細道りて海より
吹き風いそぎし所より

その易や馬よ氷に就法師

保男村より行良を傍りを星斗と有る
ふらのふれ地は海よりわく行路とを海

海してさるあられともいふゆる由なり
万葉集の行路は急下の山は標合れ
ましは剛深ゆく表をなと極む世ふいこ
白とあともや骨心とていふ海を打下り
南の海よりそそを海のこりて海音
とていふいふと海ありとありと
かゝるを頼めともまなる折也
海一の見行ていふいふ

熱田御沖儀

唐も何事鏡も法も君の花

蓬凡の人く小むひ例く志をく

成是来る礼

箱根出す人も皆くこの言

五人乃會

たろりけてちかふまある紙衣る

ふはん君見ふは紙衣る

何人具行

とと探る梅も花る朝陽

奈名しんくそそ見のれをと云日家

里し馬うりて杖つさ坂より礼高

うちかりて馬うりて坂

先はなしく杖つさ坂とあるか

とわんまかくしつはきん紙衣るのと

とわんま

今よりふ下は社の白くもろくもく又より侍加美
古来の草薙とていへり

白里や肺の猶小泣とてれり(道)

春のとき一也の名強か〜まんと酒の
要め〜して元日様とてれり(き)

二日めとぬりいせ〜な夜に春

祝春

なるきて〜い九日の神あつね

熊草や中へりり〜一二す

侍美のまに波のたといふ所不後業と人

の旧徳あり後家と新大佛寺とや云名

斗をの蔵り形見ととりと伽藍の礎れ

礎と海一坊舎を流して田相と名を替り

文六乃等像の昔方縁小堀とゆ〜の

現前とわれとせりふふ入りの御新

いま〜合おら〜の物中其杖の

名跡うさふふかしく田の原を牛草
石の寺志柳あり花のいと草花の宗
堆の双林あり枯き。竹とよのあつら
しそそんくられりき

又六ふかけりりあまし石の上
さゆくの事あひかた極うか

伴舞山田

何のふれ花といふは自然

裸よりまよふ衣又衣の風を那

喜徳心

いじらかかゝるきよき徳を極

龍尚舎

物乃花とえそあ草のつらまひ

細代氏初者尚小舎

栴のふふ行をとりや栴の花

るあ尚舎

乾甲云往日行二人

うし歸りて横見えあそ槍の木登 凡屋傍

うし和やうく かれ 歌も見えあそ槍の木登 万葉

旅の具多からん道の程のしりなれとも皆拂

旅をくれと歌の料よとかみこころを合指

破葉くさるるを ヒレケ 合指 ヒレケ のもの有る侍

後小春原むすむふいとくせ 〇 よとく

かほさ男の波るふ 〇 せとく 〇 せとく

文小 〇 せとく 〇 せとく 〇 せとく 〇 せとく

あみ外て着かき 〇 せとく 〇 せとく

初瀬

春の物や籠る人 〇 せとく 〇 せとく

とく 〇 せとく 〇 せとく 〇 せとく 〇 せとく

葛城山

ねん 〇 せとく 〇 せとく 〇 せとく 〇 せとく

之婦 多吉 峯

麻峠

多岐守存あり
龍門は新通あり

雲首より谷子甲とらふ作の

龍門

龍門の花やと戸の古き小せん
酒のふゆんかき流の花

西河

あつくと山吹りるり流のる

結鴨の籠

布尾の原に布るれ客より二十の十山の奥へ

津小裁田の川を有

大和

布引の籠

箕面乃籠

橋尾寺に細く通小あり

橋

橋つらうとささくや日くしめまふ

日くさく小菅そまひやあはなふ

橋を酒さひみりやらは橋

若法師

是ゆれにふくつる法なり
りし物もたふさ言ふゆりて曙若くも
亂るおひひ有ぬの月の夜あふさるむちと
心せりし物みちりていらるを拵音なるの
たのめふさしき或西行の技打ふさるひ
貞さるはさくともあふさるさるふさる
いんさるさるとなるといふさるさる
いとあふさるさる風流ふさる

ゆきとあふさるてハ玄具の事なり

さる

又母の志さるふさる一雉の聲

らるるさるさるさるさる一奥の院

和歌

ゆきさるのさるさるさるさる

さる

ゆきさるさるさるさるさる

とあゆひ鳥をからけりしよふし一海
幸ふふう子山野海濱あり民多し
道化乃功とせんあまの宮の道者れは
とよこひ風情の人を實にとうあめは相と
さうしてあまの朝ひの一かひのまきを道
申れ然とちり一寛かあふかし候人食用
とんとあしとよふし道はかきつはるま
るるはれし時かきつはるまの今も

能者かかんもの籠のりつとよふしと
とよふしとあまの朝ひのまきを道
目に情をらけりしよふし一海
人かかんの道はかきつはるまの今も
一かきつはるまの道はかきつはるま
あまの道はかきつはるまの今も
うらりあてえあしとよふしと
よふしとあまの朝ひのまきを道

江戸

月をいれとめちやう江戸の夏
月をそと物をもくや江戸の夏
まうりお方の浦邊ひさ津のまぎやうり
卯月申辰の夕べに勝つまうり
あつ月といつて飽くまうり
くはるかたの町をめぐり
おの海地よりまうり
まうりまうりまうり

漢人の新道と茶の夜のそえ
海老の糸えんや茶の糸
まじ糸は西原の糸
あかりふ何とす
これ何とす
かきつて
お奥と物
まうりまうり

次ノ寺白鳩の如きにして市を

明石夜雨

蛸堂やえらばき 夏生葉の舟

わさ祈の秋句のるまをさるやい浦は裏に
秋とひのともさるあふしあふし
いそんころいしこ秋句のせはしこ
心れししきいひ出さしものさあ
そあは所の秋句のさしとさしあふし

浪路の舟のふらふらに見てしはあはし
け海をたふつる 其れ東南の浪が
あふあふさきしあふしあふし
浪のしあひしあふしあふし 又後のあふ
山と陽て 田井の畑とあふしあふし
あふしあふしあふしあふしあふし
あふしあふしあふしあふしあふし
あふしあふしあふしあふしあふし
あふしあふしあふしあふしあふし

更科紀行

くせつ

こころのまをすてお月を事
ふさぐにせしむ林風の心不吹かす
とくに風雲の情をくすすとも又びり
物人とも舟を深く道か
旅路のわらわらとて花の
僕とてわらわらとて

こころも驛路の車
えん東なりくよとの
中く小わらわら
あやそこの年
か
を
さ
ら
の
ら
を
の
ら
を
の
ら

振まらんといふに、
一丁めくりしと、
前住と云ふより、
しりしこそ、
もつりぬ、
せしむし、

あの中、
柳やいのち、

枝やえの、
あつめ、
娘捨、
さし、
あつ、
う、
そ、
あ、

伊や姨もとらなほく月乃友
いよひとまほしきもの郡成
しほらやまの月を雲な
ひちりくも高きもあはれ
なりとて人根り姑の風
木曾はまほせの人の名あはれ
送き道の別り果ハ中名の姑

長光寺

月形や雲門に家と只一り
吹とるす所をいさよの野合
監齋後向の海
その中を流るりそらま
そひらきそそそ馬原の袖とよ
園原とらめあえ人の海

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The script is difficult to decipher due to its cursive nature and the fading of the ink. The text appears to be organized into several lines, possibly representing a list or a series of entries. The paper shows signs of wear, including creases, discoloration, and some small holes or tears, particularly near the bottom edge.